

宮里六郎先生のご退職に寄せて

社会福祉学部長 伊藤良高

宮里六郎先生は、2020年3月をもって、長らく奉職された熊本短期大学、熊本学園大学短期大学部及び熊本学園大学をご退職されました。その間の研究、教育、社会活動、大学運営における多大なるご功績に対し、学部として細やかながら感謝の意を表すべく、教授会にて名誉教授の称号をお送りさせていただくことを決定し、それを受けて、同月、幸田亮一・前熊本学園大学長から、宮里六郎先生に同称号が授与されました。宮里六郎先生におかれましては、32年に及ぶ長い間、本学及び本学部の充実・発展のためにご尽力くださり、誠にありがとうございました。心から御礼を申し上げます。

宮里六郎先生は、1978年に中央大学文学部教育学科をご卒業後、1980年に東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程に進学され、1982年に同課程を修了されました。当時の指導教官は、社会教育学の泰斗であった小林文人教授であり、同教授のご指導の下、東京都杉並区準公選制教育委員会を素材とした教育委員会制度の研究をまとめられました。宮里六郎先生の研究者としてのスタートは、教育学であったということになります。國學院大學幼児教育専門学校勤務後、1988年に熊本短期大学に保育内容論・保育方法論担当教員としてご着任され、同講師・助教授を経て、1999年から熊本学園大学短期大学部教授、熊本学園大学社会福祉学部教授を務めてこられました。

熊本に赴任された直後には、東京での保育者養成や保育者との実践研究を踏まえて、「熊本保育問題研究会」を組織され、その生みの親として、熊本県における保育研究と実践を一貫してリードしてこられました。また、全国保育問題研究協議会編集委員会『季刊保育問題研究』編集委員長や全国保育団体合同研究会過疎分科会等における活動をはじめ、熊本県社会福祉審議会児童福祉専門分科会委員長、熊本県里親委託等推進委員会委員長、大津町及び多良木町子ども・子育て会議委員長など、学外における数多くの社会活動にも真摯に取り組んでこられました。学内的には、第一部社会福祉学科長として子ども家庭福祉学科の創設に関わり、また、附属敬愛幼稚園長・熊本学園評議員として未来志向型の新園舎の建設や子育て支援（預かり保育、2歳児保育）の充実に携わるなど、大学教育・運営の発展に大いに貢献してこられました。こうした学内外に及ぶ多彩な活動とキャリアを通して、宮里六郎先生の研究は、保育実践研究から子ども家庭福祉論、ソーシャルワーク論へ、そして、保育論の構築へと、往還的な広がりや深まりを見せていくこととなります。

そのなかで発行された宮里六郎先生のご高著三部作となる『「荒れる子」「キレる子」と保育・子育て 乳幼児期の育ちと大人のかかわり』（かもがわ出版、2001年）、『保育に生かす実践記録 書く、話す、深める』（同、2006年。古庄範子氏との共著）、『「子どもを真ん中に」を疑う—これからの保育と子ども家庭福祉—』（同、2014年）は、いずれもやさしく話し言葉で書かれています。そのこと自体が、「保育者へのメッセージ」として、宮里六郎先生の「保育者といっしょに悩み、いっしょに考える」、「保育者を励まし元気が出る」ような研究でありたいというスタンスを見事に物語っています。保育の現場で、保育者と連携・協働しながら研究を進めていくという当たり前ともいえる研究姿勢を常に、地道に、そして、丁寧に進めてこられたことは、職場の同輩、また、同じ保育学の研究者として、まさに敬服に値するものであると言えます。

余りの多忙さゆえ、ときに体調を崩されることもあられた宮里六郎先生ですが、今後は体調管理に十二分にご留意され、これから後続く保育学・子ども家庭福祉学研究者を導いていただければと願っております。

最後になりましたが、宮里六郎先生の更なるご多幸とご健康を祈念いたします。たまには、また、一緒にお酒を飲み、ゆっくりと保育について語り合いたいものです。